

報 告

「都市の家と農村の家」

—課題報告の課題によせて—

安孫子 謙

最初に、私のこの報告の課題といいますか、問題設定を申しあげ

ておきます。私の場合は、自分のやつでありますことから当然なんですかけれども、経済学の分野から家という問題を取り上げたらどうなるかという発想しかできないのです。そうしますとご存知の通り経済学というのは生産過程とか流通過程については非常に研究をやっておりますけど、消費過程あるいは生活、狭い意味の生活ですが、そういう問題になりますとほとんどやつていないと、いうのが事実です。そういう点ではこれは経済学の一つの盲点みたいなところで私達が考えていくとなると大変苦労するところです。

前回の蓮見さんのご報告を拝見しますと、社会学の方では家と家族とを別に考えておられるわけですね。ところが経済学の方ではこれをはっきり分けるという意識はあんまりなかった。そういう点で家と家族はちがうんだといわれてみるとなるほどと感じる点があるわけです。ただ、そういう問題をもう一べん我々の方のとらえ方に引き直して考えてみると、家といふんでしようか、家族といふんでしようか、それのもつてている役割とか機能とかいうものの歴史的な違いがあるわけで、これは明確に認識することができる。つまりその家という超世代的連続体と、その時々の現に存在する家族といふ人間集団との関係がどうなっているか、超世代的な連続体の家から家族がどのように規制されているか、あるいは家族のどのようを行動がそういう連続体としての家をどう変えてゆくか、というふうにとらえることができます。そういう点の歴史的な段階的違いを基本的に決めてくるのは何かと考えてみると、その時々の生産關係あるいは一般に階級關係の中ではたす違いがあると同時に、その

基礎には家ないし家族に即した問題として生産力的なレベルでの問題があるわけです。

そうとらえた場合の家の機能というのは、生産力レベルに即して言えば、生産の中で果たす家の機能と生活の単位としての家の機能の結びつき方という問題として大きくつかまえることができるんですねいか。結論からいってしまうと、まず家が生産の単位でもあり、同時に生活の単位でもあると、そういう結びつき方をしていく段階。これは原始社会が崩壊して古代社会が成立した時から封建社会の解体に至るまでの、それから資本主義の中にも現在の農家のよう一部存続してまいりますけれども、基本的な論理としては封建社会の解体によってなくなる、そういう非常に長い段階をつくっていけるわけです。それともう一つは生産の単位と生活の単位が切り離されて、家がある意味では生活の単位だけになってきて、生産の単位は、例えば企業というような形で別個のところにつくられるようになつた段階。こういふかたちは、実はいろいろな歴史段階に部分的にはあらわれてまいります。大経営という形態とか、領主直営地といふのも、一種のそれだと考えてもいいわけです。そのような歴史的段階の違いをふまえながら、まず生産の労働組織と生活のための組織という観点から資本主義によって成立してくる労働者の家族と資本主義の中にも残っている農民家族との基本的な違いを見ていくことなのです。

第一回の委員会の時でしようか、小池先生から、いま家の問題を考えるのはなぜか、そこをはっきりさせなければ今年の課題報告は

はけてくるのではないか、という意見がだされたわけですけれども、そういう点でいえば、私の今のような問題の立て方は、実は現在の村の解体あるいは農民層の分解という問題に重要なかかわりあいをもつたのだろうと思つております。つまり、現在の農民層分解が古典的な分解とはちがつて非常に複雑な要因をもちながら従来とはかなり変わつた形態で進んでいるわけですから、古典的な分解理論だけではなしにもう少し分解論として共通する基礎的なものをとらえだし、そして現在の問題に引きつけることを考えますときに、いま申し上げたような問題のだし方は一定の有効性をもつたのだろうと思っております。一つだけ例をあげますと、例えば農業経済学の分野ではやは綿谷赳夫さん、梶井功さん、それにここにいられる島崎さんなどが指摘されているわけですが、現在の分解を規定する一つの条件として農民の家族労働の評価が非常に確定した水準としてできつたあるという問題があります。古典的な規定でいきますと農民家族の生活費は肉体的最低限度まで下りうるところなのですけれども、そういうようなことはもはや起らぬ。一定の生活水準を維持することができなければ農民は極めて容易に經營を放棄する。といつてもまったく放棄するではなくて一時放棄して出稼ぎに行くとか、兼業に家族員のどれかがでいくとかいう形で部分的には放棄する、いつも簡単に行なわれるわけです。このような古典的な命題からしますとそれに合致しないような現象、つまり、農民の家族労働報酬の水準が都市の労働者の労働所得水準に、あるいは具体的には賃金水準にリンクされてくるという傾向が一体どこからでてくるのかと

いうような問題を考えるときには、単に生産単位としての旧来の経済学的な抽象的なとらえ方にとどまつたのでは明確な形での解説がでてこないのでないだろかと思います。そこで先程いつたように思いきって生産単位と生活単位という両者を経済学の問題の中に取り込んできていつたらどうなるかということです。そのためには実は、家事労働といふものの位置づけまで入つていかないとほんとは解けないような気がしております。とくに広義の家事労働の中には育児とか教育の問題も入つてまいりますから、そうするとそのことはとりもなおさず労働力の再生産過程になるわけにして、それを取りこまない経済学的なとらえ方の家といふものは、非常に大きな欠陥を生ずるのではないのだろうかと思うわけです。これが第一に申し上げました問題の設定の意味です。

二番目に、生産過程での労働組織と生活面における組織といふ、家が従来もつておきました基本的な二つの機能の関係について考えてみたいと思います。これが結合している形態から分離した形態へという問題になるわけとして、いってみれば農民層分解の問題であるあるいは労働者層の形成の問題でもあります。ここで最初にとらえてみたい問題は、生産と生活が結合している形態は一体どういふ意味をもつかということです。もともとこの両者が結合していたわけではなくて、そのことは原始社会を考えればよくわかります。それが一致したとき、結合するといふか、エンゲルスが示したようにならう段階にはじめて家族が現われてくる。つまり共同体的な大きな生産の単位から小さいものへと変わっていく、その過程では

じめて家族とくらものができてくる。ですから逆に生産と生活とが分離していくところの過程は、そういう意味で本来の家族的な構成が解体していく問題であると考えていいのではないか。つまり労働者家族は本当の意味での家とか家族の問題ではなくって、その一つの転化した形である、あるいは家族の構成原理がまったく違った観点で組み立てられるという歴史的変化を意味しているのではないかとうことです。

そこでつぎに具体的に農民家族を考えていくわけですが、そこでは経営と生活が分かれ難く結合している。従ってそういう中では生産労働と家事労働とが明確に切れないような形で持続している状況があります。そして自由自在にどちら側からでも押して行くことができる。ただ、ブッシニする力は一方的に生産の側からかかるべきです。例えば封建社会では農民は封建地代を払うために大変な労働を行なわなければならない。家事労働はこういう過程では簡単に圧迫されていくといふ状況がでてきます。それから又、自給経済から商品経済に入りますと、階級を搾取関係を除いて考えましても、自分達の生産したものの価格が下落したために生活ができないといった状況がでてきます。従って農民経営、とくに我々が問題にしてくる封建社会から資本主義社会における農民経営というのは、この生産単位、生産の労働組織といふ側面からブッシニを受けまして、生活単位としての確立が常に受身にまわるという状況があるわけです。それが古典理論によると肉体最低限度まで下がりうる。

それに対して生産の単位と生活の単位が分離してしまった労働者

家族、これを一応都市的な家族と考えてみますけれども、この場合には、家族にとっての直接的な目標といふのは自分たちの生活の側があるだけでして、生産の方はいうまでもなく資本家の問題になってくるわけです。かれらが生産にかかるかわり方といふのは自分の労働力を販売するということだけにして、本来賃金さえもらえばよい。そして、その賃金によって自分達の生活が守られるような状況があれば満足するわけですから、ここで家族の行動原理はあるつきり違った意味をもつてくるのではないかと思います。もちろん農民家族にしても労働者家族にしても自分たちの生活、子孫を次々と育て人間として生き続けるといふこと、そういうことが究極的な目標にあつたわけなのですけれども、直接的なおかれの状況からでてくる意識に致しますと、農民家族の場合はぎりぎりの状況におかれると、生活よりも生産の方がまず勝負だという観念がでてくるわけです。ですから生活の豊かさといふことよりも一生懸命生産的労働をやってるそちらの方が評価されてまいります。とくに支配階級からすれば家事労働からは剩余労働はほとんどとれないわけですから、剩余労働を収奪する生産的労働だけが非常な関心事になつてまいります。そのことがイデオロギー教化として家族の行動原理を規定するようになってきたといふ面もあると思います。ところが労働者家族の場合はそうではなくて生産的労働といふのがどういう形であれ、要するに労働力の販売した価格だけが主たる問題になつてしまいまして、そしてこの賃金水準は生活との関係で常に考えられ

す。

以上のような過程はいわゆる原蓄過程としてあるわけですが、それについて農民家族の生活と生産との結合が分離するという、今いつたような側面を有する意味ではもっと評価していかないといけないのではないだろうかと思うのです。つまりこの農民層分解の問題は本源的蓄積としてとらえれば、これはいうまでもなく資本の蓄積であり、資本側からみた労働力の蓄積になるわけですから、生活の問題が落ちてくるのは当たり前なんですが、単に資本蓄積の問題としてだけとらえるのではなくて旧来の家族の非常に大きな転機と考えてみると、人間のいわば生活史的な変化もこれによつて引き起こされているといふことの歴史的な意味を考えていいのではないかと思ふわけです。実はそのことがでまいりませんと、マルクスがいふ二重の意味での自由といふ問題の、じつてみれば人間史的な意味がはつきりしないのではないだろうかといふ感じもするわけです。

第三の問題として、労働者家族と農民家族といふ二つの両形態の比較を少しあげておこうと思います。例えばこの前輩見さんが出されました家族の形態ですね。夫婦家族、直系家族、傍系家族といふ三つの分け方で、農民家族と労働者家族との違いが浮き彫りにされてくるのではないかと思うのです。つまり非常にわかり切ったことですかけれども、農民家族の場合には生産的労働組織といふ側面をもちます。もちろん必ずしも補完的な共同体的関係は附隨的にあるわけですが、基本的には家族労働を中心におこなわれますから生産過程に規定される家族基準といふものがどうしても問題になる。これは生

産力そのもののあり方に規定されるわけとして、社会的分業の問題だといつてもいいかと思いますが、そのため同じ農民経営であつても生産力水準が違いますと家族規模は明らかに違う。日本でも平安末期の山村吉則の名主経営のようなもの、そういうた規模とそれから江戸時代のはじめと終り、そして明治、昭和といふようにそれが段階における生産水準に規定された労働力編成がでてくるわけとして、それが家族の規模と形態を規定していく。これが第一番目の問題といたしますと、第二番目には相続の問題が加わつてくる。これはまた家族の規模と関係いたしまして、それから傍系を含むか、直系だけかといふようだ、そういうた家族員のくみあわせですね、家族関係といつたらいいでしょうか、そこを規定するものになる。相続といふのはいうまでもなく家産があるから問題になるわけです、家産といふのは、家族が生産単位であれば必然的に生産手段の体系と内容的に同義となつてまいります。そういう家産は切り売りすればもはやまとまつた生産手段の体系にはならないわけですから、当然それは一定の大きさになり、一定の組み合わせによって相続されていかなければならない。このような相続の問題が、その家族の中にどのようなものを残すかといふことに密接にかかりあつてくるのだと思われます。たとえば傍系親族で、相続において分配することもできないし、あるいはまた独立させるために生産手段の体系をワンセット貰い与えることもできないが、しかし放りだせば生きていふことはできないといふ状況では傍系親族をどうしても抱えこまざるを得ないといふ問題がでまいります。

この点を労働者家族の方でみますと、この場合には生産単位という条件がないわけですから、家族規模というものは生活の水準だけで決まつてくる。生活できるのであれば自分の家族は少なくていいといふ一般的な原則がでてまいります。そういう中では積極的な所帯分離がおきてくるわけとして、所帯分離することによってむしろそれぞれの分離した諸家族が自立した生活をしていくための努力をしているところになります。労働者家族の場合、一般的に言えば核家族といいますか夫婦家族といいますか、そういうものが次第に主流になってくるところになります。労働者家族の場合は、一般的に言えば核家族といいますか夫婦家族といいますか、そういうものが次第に主流になってくるところの傾向は、そのような家のもつてゐる機能の面から考えることができるのではないかと思ひます。それから相続にいたしましても労働者家族では生産手段としての家産の相続といふことは問題にならぬわけです。労働者といつても自分の家を建てたり貯金をもつてしたり、わずかの財産をもつてるとこうことはあるわけですけれども、生産手段としての相続ではなくより抽象的な私有財産相続といふことだけが問題となる。従つて、家産における相続と違つて均分相続といふことが原則になつてくる根拠があるわけですね。

その他、例えは労働力の再生産の仕方もこの両形態で非常に違つてしまひります。いうまでもなく農民家族の場合には出産・育児・教育などが一貫して家業のための自家労働力の再生産の問題として位置づけられてまいります。労働力の陶冶といふこともまた自分の家族経営の内部で行なわれる。ですから例えは昔からよく言われますように子供が生まれないところがその離縁の理由に十分なる。

そういうふうに農民家族にあっては自家労働力の確保といふことが前面にでて、家事労働もそれを遂行するために行なわれていくといふ形になるわけです。ところがそれに對して、労働者家族の場合には自分じしんの労働力の再生産はどうしても必要だが、子供の方は經濟的意味では家族の直接的な必要にはならない。確かに老後を見てもらうために、子供を育てたいといふようなことが問題になるかも知れませんが、むしろもっと人間としての存続、人類としての存続といった問題になるわけで、そこに例えは親子の愛情といったものがストレートに生きてくる根拠があるわけです。そこで広い人間愛みたいな問題をもし考へないと、平氣で子供を捨てるといふ現象が逆に起きてくる。子供を捨てるところは、農民家族でも労働力再生産だけがネライであること、この場合には多くなりすぎると間引くといふことがしばしばおこなわれた。しかしそれとはまったく違つた観点から労働者家族における子孫の位置づけができてくる。そこで親と子の關係を支えるものは、家族そのもののもつてゐる生産的な機能とか生活的な機能とかいう經濟的範囲、物質的側面からはでてこない。精神的なといふか人間らしい意識あるいはイデオロギーの要素が全面的にあらわれないと家族といふのは大変索漠たる状況になるといふ面をもつてゐるのだろうと思われます。

四番目の問題として日本における労働者家族と農民家族との關係を歴史的に少し検討していくかなければならないのですが、これが本論で、今までのすべては序論だといつていふわけです。しかしここ

では歴史分析を全部やる時間があれませんから結論的な部分をいくつか申し上げてみたいのですが、一つは分解の経過、つまり労働者形成の問題です。前回の通信をみますと岩本君は、日本資本主義に規定されて家とか土地とかがこうなったので、その逆ではない、と積極的な主張をしています。ただこういう抽象的な言い方だけだと、例えば山田盛太郎さんがとらえたように、日本資本主義の基底としての土地所有あるのは農民経営のあり方というものと岩本君がいっていることとは、まったく対立するのかどうかよくはわからない。日本における両者の関係を見ていった場合に、どちら側がどちらを規定したかというあたりは、やっぱり今年の大会の問題としてぜひ明らかにしてほしい感じがするわけです。それも戦前資本主義の場合と戦後資本主義の場合とで違がでてくるかも知れない。ここでは戦前、戦後の問題を別々に問題提起したいと思います。

それは、労働者形成が日本でどのような形で進行したかといふことに、非常によくあらわれてまいります。つまり、よくいわれているように日本の場合は、かなり完成した資本主義的な生産形態が、具体的にいえば機械制生産が外国から輸入されるというかたちで発展してくる。マニユファクチャーアそのものはきわめて短い期間、しかも十分発展する暇なしに一挙に機械工業階段へと入っていく。そのような日本資本主義の展開形態に規定されて労働者階級の形成は西ヨーロッパ的な農民層の典型的な分解、つまり農民経営の壊滅を伴うような農民層分解として行なわれてきたのではない。むしろまるごと労働者になつたと言えば待が一番はつきりしている。農民

の方は確かにいわゆる夜逃げ的な形態もないではありませんけど、それよりも圧倒的な部分はやはり農民家族からの一部が労働者としてでゆく、あるいは一定期間出稼ぎ的にででゆくという形態になります。そうしますと、さつきみたような生産と生活の分離のもつてゐる意義が、日本の労働者の場合にはあくまでも形でしかあらわれてこない。生産組織と生活組織との結合していく状態、つまり農民家族の解体の上に労働者家族ができるところのではなくて、それはそれとして持続しながら、しかもそこには一定の家族関係、血縁関係を残したまま労働者家族が形成されてくるという面があります。他方、江戸時代から続いているいわゆる町人家族といいますか職人家族といいますか、そういうしたものについても、例えば大工さんとか左官屋さんとかが、自分である程度生活手段を持ちながら大工の棟梁といったところにまとめられていくという、分離したようならしないような形で実質的には實労働者化していくということもあります。そのように考えてみると、純然たる労働者家族としてきれいにでてくるのは非常に限られた分野ではないだろうかと思うわけです。それがより多く集積されていったのは、軍の工場を中心とする当時の機械工場、総じて軍需工場的なものでしよう。それに對して生産旋回のもともと華々しい部面、紡績、製糸部面などにおいては、ご存知のとおり女子労働者を使うわけでして、これは農民家族、農民経営の否定なしに、あるいはむしろ農民経営の支えのものに労働者としてある一定時期立ち現われるわけですから、このような労働者階級の形成では完全な農民家族の転化を押し進めること

はないわけです。

そういうことを果たして資本主義の性格からそりなったのだと説明するのか、そのような労働力を資本のもとに包摶しえたから日本の資本主義は諸外国の機械制工業と十分たちうちできるよう条件を作り得たのか、どうところはたしかに議論が別れるところだろりと思います。ここでこの点に深入りすることは避けますが、ともかくも資本主義的な労働者家族のでき方自体に農民家族との関係が非常に特殊な形であって、そのことが日本の労働者家族のいわば農村的性質をずっと残すことになったのだと思うわけです。この点は出自の問題だけではなくて、その後の状況からみても例えば労働者の生活自体が農民家族によって支えられるという側面、それからまた忙しい時にはいつでも農村に帰って働くというようなそいつた結合の仕方を続けてきたのだろうと思います。

当初の原蓄過程のあり方がこのような形でスタートしますから、明治30年代に資本主義が確立した時、それを逆にいふと農民家族が全体として潜在的過剰人口として位置づけられたともいえるわけですからども、そういう農民家族の中からどのような形で労働者への転化がなされたかといえば、基本的には今申し上げたのと同じような形態が、一般的にはよりゆるやかな形で進む。それは相対的過剰人口の流出ですから何よりもまず生産力的な発展と一義的にかかわるわけでして、一面では資本の蓄積の状況に、他面では農業生産力の発展とともにかかわってまいります。ところが日本におけるこの農業生産力の展開の形態といふのは、農業を資本主義

が征服しないから当然そのですけれども、労働節約型ではなくて、労働集約型の農事改良としてあらわれてまいりますから、有機的構成の問題として、これが容易に大きくなつていかない。従つて農民家族ないし農民経営から反発される過剰人口もそれほど急速には伸びてましません。ごくゆるやかにぼつりぼつりと出る形をとるわけです。労働者家族と農民家族とのそのような結びつき方が、それぞれの生産力構造を基礎としてできている。そういう結びつき方があるからこそ戦前日本資本の蓄積構造が完成するわけで、それともう一つ植民地を入れますと完全にこれで戦前型の蓄積構造ができ上がつてくる。以上はごく常識的な線での発達にすぎず、ほんとうにそういう考え方が当たるかどうかといふことで、実は大正期の家計調査と現在の家計調査とを対比してやりかけているのですけれども、まだ申し上げられないのが残念です。ともかく、そんなこともひっくるめながら、都市的な家族と農民家族との関連の問題をめぐって、ほんとうはそれに就業構造といふか労働市場の問題、それから今いつた生活レベルでの家事労働のあり方などいくつかの指標をとつて、両者の違いだけでなく関連、それから展開方向をおさえてみると戦前期についてかなりわかってくるのではないかと思っております。

戦後の場合一番大きな変化は冒頭に申しましたように、農民家族の行動原理が非常に違つてきましたという面があります。それは何よりも家計費水準、いわゆるリ水準が確定した水準としてあらわれてくる。つまり¹⁴、この日はプラスかマイナスかですが、この家計費の

水準がかかるのように弾力的に幅をもって押し下げられればどんな下がってくるというのではなく、下の方が非常に硬直的になつてきているわけです。そうなりますと、その線がいわば農民の就業構造を決める分岐点になつてくる。肉体最低限度まで我慢しないで、オートバイを買えないということだけで働きに出るということになるわけです。そのことが実は無意識のうちに農民家族の変化をもたらしていく、古典的な規定による農民家族あるいは戦前の段階規定を充けた農民家族と異質な農民家族になつてきている。

この変化がどのようにして起きてくるのかという問題ですが、それには外的な条件と内的な条件とを分けることができて、論者によりまして重点のおきどころがちがいます。一番早い山田盛太郎さんの場合でいえば家族労働の民主化という意味での内的な要因をあげます。この民主化というのをどう解釈するかはいろいろ具体的な分析を必要とするのだと思うのですけれども、おそらく家族労働評価がどういう観点でなされるか、つまり農民経営がどれだけ深く価値法則の中に入りこんで、その中でどれだけ強く家族労働を意識し、それによって競争するのかという条件がかかわっているのではないかと思うわけです。民主化というのは最後にはイデオロギー的なものにいくのかも知れませんけれども、基本的には戦後の生産力構造の中からその問題を考えてみなければいけないわけです。

外的条件として通常あげられますのは労働市場の展開の仕方です。これをあげる人は多いわけで梶井さんなんかこの面を強調される方です。つまりいつでも自由に労働力が販売できるという状況ができる

とくると自分の生活水準について泣き寝入りはしなくなる、苦しければよそにいって賃金をとつてくるという状況ができるてくる。しかしこういう外的条件の問題は、高度成長期に入つてこないと提起できないことになります。少くとも一九五五年度までは就業構造といふのは広く深く開かれていたわけではありませんで、むしろ本格化するのは民間設備投資が労働力の限界につき当たった時期、從つて一九五八年前後ではないかと思います。ところが山田さんの場合は、ご存知のとおり農地改革の一つの成果として位置づけられてくるわけでして、少なくとも外的要因を強調する人よりも五、六年もしくは七、八年前に問題がスタートするという形になります。

それでそのような状況がでできたということは、言ってみれば、外的条件も両方引つくるめて現在の農民家族の行動原理が非常に労働者家族に似た面をもつようになつてきてている。特に後継者の流出といふ問題はまったくそうで、親の職業と違うのが当たり前だと考えてくるわけです。そう考えることは労働者家族ならばなんでもないことなのですけれど、農民家族の場合は土地を基礎とする家産であるてるわけです。それをいわば性格転化させることになつていて、家畜とか農機具といふのは後継ぎがいなくなれば何の意味もないわけですが、とくに土地はそうではなく、生産手段の体系としてあつたものがそのようなものとしてはこわれてしまつても、純然たる抽象的な意味での私有財産として残り続けるということになります。だから私有財産として十分に生きてくる土地のようなものはまったく放棄する気はないわけでして、むしろ自分が労働者家族として都

市へでていく時の安全弁、最後のよりどころになってくる。

このような農民家族からでてきた人達が安定的な都市労働者家族にすべてがなるかといふと、依然として農村への還流がある。そしてこの還流部分といふのが、特に最近の重要な傾向としては、それ自体が潜在的過剰人口にもどるのではなくて、流動的過剰人口として農村と都市とを動き回るというような状況がでてきている。ここでまた新たな意味での労働者家族と農民家族との関係があらわってくるわけでしてそれに伴う相続の問題、家族の人間関係、家事労働のあり方、教育の問題、家族形態、家族関係の問題などが、もう一度そういう観点から整理されていくべきではないかと思うわけです。
最後の方はたいへん切りつめてしまひましたが、経済学の方から接近した課題というのはこんなところにあるのではないか、ということをおわかり頂ければ幸です。